

## 「メノウの産地：玉川」

---

土浦の考古学 No. 17 でもご紹介しましたが、2016年3月に「烏山遺跡・八幡脇遺跡出土玉作資料」が土浦市指定文化財となりました。勾玉や管玉などの玉類製作の途中品や破片、砥石などの工具、ともに出土した土器など、古墳時代前期中葉～後葉の玉作り資料が指定されました。特にメノウ製の勾玉の工房跡としては日本最古で重要な資料となっています。

この勾玉の素材となるメノウは、石英の一種で、緻密な石英に酸化鉄などの微粒子が混ざったものです。半透明で、白色～赤色の縞模様を特徴とします。比較的硬く傷がつきにくい上、割れにくい性質があります。実験用の乳鉢や火打石などさまざまなものに用いられています。主な産地は茨城県久慈川・玉川流域や島根県、石川県などです。土浦入りの玉作りにおいては、扁平で小ぶりな河原の転石を利用していたと考えられています。

玉川は、常陸大宮市から那珂市との界を流れ久慈川に合流する一級河川です。玉川流域は土浦入りから直線距離で約60kmあります。「常陸国風土記」久慈郡の条には以下のように書かれています。

「北に小水有り。丹石交れり。猶、色は琥碧に似れり。炎を鑽るに尤好くして、玉川と号づく」

玉川で見られるメノウについて書かれた部分で、色は琥珀のように赤く、火打ち石に適していると書かれています。古くから、赤いメノウの石が重要視され玉の素材とされてきたことから、「玉川」と呼ばれていたようです。

秋の企画展では「常陸の玉つくり」をテーマにします。ぜひご覧ください。



玉川：常陸大宮市矢口橋付近



玉川産メノウ